

1621年から1641年まで発刊された。(The Oxford Companion to English Literature)

- (2) Roger P. McGutcheon: *Eighteenth Century English Literature*, 1950. p. 15
- (3) Cf. *The Cambridge History of English Literature*, Vol. IX, Chap. I.
- (4) Ibid., p. 25
- (5) Roger P. McGutcheon: *Eighteenth Century English Literature*, 1950. p. 2.
- (6) *The Cambridge History of English Literature*, Vol. IX, p. 20
- (7) 漱石全集第十八巻文学評論 p. 428
- (8) Ibid., p. 436.
- (9) Emile Legouis and Louis Cazamian: *A History of English Literature*, 1951 p. 777.
- (10) Ibid., p. 772.

小説には性格描写の濃度がやや鮮明に現れ出したと見えて、前述の「劍橋英文学史九卷」にも次の如く述べてある。

“……in *Singleton*, we find Defoe beginning to display a power of characterisation which is seen in very respectable measure in *Moll Flanders* and, also, in *Colonel Jacque* and *Roxana*.” (p. 22.)

(シングルトンに於て我々はデフォウが性格描写の力を発揮し始めたことを発見するが、それはモルフランダーズに於て又カーネルジャックやロックスナに於て相当な程度に現われている。)

19世紀の小説の特質である「性格描写」は今世紀にかけて、更に細分されて *psychological delineation of character* (心理描写) という要素が開拓された。つまり人間の性格は固定したものではなく、たえず流動する心理によつてつかまねば正確に把握出来なくなすのである。小説の近代性は心理描写の濃度に依て測定されると言うても言いすぎではないだろう。更に最近代の作家達の中には社会的な観点にのみ立つて創作をする者も居れば、plot を全然無視した思想性の比重の多い作品を発表する者も居る。James Joyce は所謂 ‘stream of consciousness’ (意識の流れ) を描写する内面的独白の手法を用いた *Ulysses* (ユリシーズ) を発表して現代人の性格を解剖し、Marcel Proust は *A la recherche du temps perdu* (失われし時を求めて) に依て人間を瞬間的衝動の無秩序な集合に分析することを試みた。

## 5

このようにして近代小説の様相は一言で捕捉できない程、複雑な特質を帯びその複雑さは時代と共に深化して行くようである。

この近代小説の物差で Defoe の小説を計つて見ると、彼の拠り所は結局 realism の一点である。その realism も人物が類型に陥り勝ちだということでは、近代小説の一步手前で止つている。然し Cazamian が指摘する如く「彼の言葉は彼の思想の様にあくまでも具象的である」<sup>(9)</sup> ことではロマンスの世界からもはるかに前進している。かくてロマンスと近代小説の中間にあつて、そのつなぎの役をしたのが Defoe の小説だと言えないだろうか。Defoe の小説はそれ自体の本質的な価値に於て高くはなくても、文学史上に於ける相対的な意義は軽視できないものがある。

要するに Defoe が近代小説につながる拠点は彼が彼以前の文学の支えとなつた崇高とか壮厳とか深遠とか高尚とか言う文学の理念を無視してあくまでも realism の手法によつて、‘average middle class’<sup>(10)</sup> の代弁者として庶民の文学への橋渡しを作つたことにあると結論してよからう。

(註)

(1) 英國最初のニウズパンフレット ‘Coranto’ は六年間の中断期はあるが

ことになるのである。註文通り別々の罫に入るところは誠にけつこうであるが too fictitious な話である。こう言う子供だましの手は到る所に見出される不自然さで、全くロマンス以前のお伽噺としか考えられない。

次に近代小説に取つて「物語性」に勝るとも劣らない特質は character sketches (性格描写) であろう。この点については Defoe の作品は近代小説からはるかに縁遠いと言えよう。殊に *Robinson Crusoe* には、性格の必然性から生ずる事件よりも偶然の結果生じた incident の連続と見らるべきものが多い。Crusoe という人物の situation は設定されているが character は彫刻されていない。漱石の言葉を借りると「場面の変化する割合に性格の活動は単調である。」<sup>(7)</sup>

All this while the storm increased, and the sea, which I had never been upon before, went very high, though nothing like what I have seen many times since; no, nor what I saw a few days after; but it was enough to affect me then, who was but a young sailor, and had never known anything of the matter. I expected every wave would have swallowed us up, and that every time the ship fell down, as I thought, in the trough or hollow of the sea, we should never rise more; and in this agony of mind I made many vows and resolutions, that if it would please God here to spare my life in this one voyage, if ever I got once my foot on dry land again, I would go directly home to my father, and never set it into a ship again while I lived.

(*Robinson Crusoe*, p. 7)

(この間嵐は益々はげしくなつた。はじめての経験の海は非常にあれ狂つた。その後幾度も会つたものに比べては、否数日後に会つた嵐に比べても何でもないものであつたが、その時は未熟で無経験な船乗りにすぎなかつた私には全く應えた。私は波が来る度に今度は船が吞まれてしもうだろうと思ひ、船が波の底に下つて行くように感じられる毎に、もう浮び上つては來ない氣がした。私はこのような心の苦悶の裡にあつて幾度も誓いを立て、神がこの度の航海で命を助けて下さるなら、再び陸地を踏むことが出来るなら、すぐさま父の許に歸り、生きている限り二度と足を船にふみいれまいと幾度も決心した。)

この quotation は Crusoe が海上で最初に経験する暴風雨の叙景であるが、死に直面したような境地に於ける主人公の個性は余りにも普遍的である。今一度漱石の批評を借りると「これは暴風雨の記述とは受取りにくい悶れなものである。物凄くも何ともない。……此事件が主人公の上に影響して必然なる性格の活動(即ち次の事件)を引き起すとする、しかも其事件が暴風雨の物凄さから出るとすると、是丈ちや役に立たなくなる。暴風雨の物凄さが読者に見える様な手續をとつて置かなければ、主人公の性格の活動は必然でなくなる。」<sup>(8)</sup> Crusoe の人物は、常識的でねばり強く、何とか言えばすぐ神様を持ち出して説教口調の鼻につく英国人に共通な普遍性を持つている点では作者の Defoe と共に個性の薄い所謂 'A True-born Englishman' (きつすいの英国人) である。然し *Robinson Crusoe* 以後の

し彼等は Defoe ほど読者の注意を引くことが出来たであろうか？」<sup>(5)</sup> という意味を述べているが、たしかに淡々とした文章ながら読む者の胸にじかにせまる realism の実感がある。豊かな想像力で緻密に描き出すこの写実的な style は Defoe だけのものであり、「Brunetière が Balzac を評した文句を借りると Defoe は他の作品に示さない ‘the power to make alive’ (生々と写す力) を発揮したのである。それは彼以前の散文物語の作家達には無いもので、今後もこの物語の形式はまねられるかも知れないがその精神はまねられないものであつて、Defoe 自身と言えども二度とつかみ得ないものである。」<sup>(6)</sup> Defoe のこれまでの作品を全部抹殺するとしても、彼はこの小説だけによつて世界文学の系列に座席を与えられると言われるのは、彼がこの realistic な描写力を発揮したためである。

#### 4

それでは、はたして Defoe の作品は「近代小説」の名に値するであろうか。Defoe は「ありそうにもない作り話の romance」を「ありそうな物語」に書きあげた点で「英国小説の父」と俗に言われているが、小説も近代の作品になると複雑多様な要素が含まれているので簡単には片づけられない問題である。

小説の第一の要素は plot (筋) であろう。construction (構成) 又は story-telling (物語性) というても同じことで、plot は小説に限らず叙事詩や劇にも必要なもので、小説の最も原始的な又最も基本的な要素である。然し単に「面白いお話」というだけでは世間話や通俗小説と文芸作品を区別するものは無い。それ故に「それからどうなつたか？」という単純な好奇心の追求から「どうしてそうなつたか？」という知的な人生探求への elevation に近代小説の特質が見出される筈である。この意味では Defoe の小説には幾多の weakness of the plot がある。彼のこの缺点を「十八世紀英文学」の著者は ‘weak organization and overmuch moralizing’ (構成の貧困と過剰な道学臭) というて指摘している。(同書 p.12) *Robinson Crusoe* や *Moll Flanders*, 1722 の主著をはじめ爾後の小説は千篇一律に主人公の生立から始めて、老後の説明で結末をつけている。波瀾に富む物語も結局世俗的な成功という一つの目標を目ざしている丈で、読者には始めから見当のつく種明かしにすぎない場合が多い。それだから辻つまをあわせるためには、どのような不合理もかえりみない。例えば *Crusoe* が山羊を生捕りにするために罾をかける話があるが

……going one morning to see my traps, I found in one of them a large old he-goat; and in one of the others, three kids, a male and two females. (p. 141)

(或朝罾を見に行くと、一つには大きな年を取つた牡の山羊がかかり、他の一つには三匹の子山羊がかかつていたが、中一匹が牡で二匹が牝であつた。)

牡は獐猛で手におえないので逃がしてしまつて、子山羊をつれて帰つて飼ひ馴らす

と呼ぶ丈で満足しない人々は彼が庶民の天才の最大な者であることを肯定することに満足するであろう。)

と結んでいる。次に Defoe の近代小説への接近は写実の描写ということにある。*Robinson Crusoe* は Alexander Selkirk という男が南米の無人島で数年間暮した実話を Defoe が潤色して記録文学風に書きあげたものとされている。無人島に漂着した Crusoe は難破船から種々の日用品を持ち帰り、自分で小屋を作り、野生の山羊を飼ひならし、開墾をして穀物をまいたり、ボートを作つたりして、犬や猫やおおむを相手に暮すが、或日海岸で人の足跡を見て驚くくだりがある。

It happened one day, about noon, going towards my boat, I was exceedingly surprised with the print of a man's naked foot on the shore, which was very plain to be seen on the sand. I stood like one thunderstruck, or as if I had seen an apparition. I listened, I looked round me, but I could hear nothing, nor see anything; I went up to a rising ground, to look farther; I went up the shore, and down the shore, but it was all one: I could see no other impression but that one. I went to it again to see if there were any more, and to observe if it might not be my fancy; but there was no room for that, for there was exactly the print of a foot—toes, heel, and every part of a foot. How it came thither I knew not, nor could I in the least imagine; but after innumerable fluttering thoughts, like a man perfectly confused and out of myself, I came home to my fortification, not feeling, as we say, the ground I went on, but terrified to the last degree, looking behind me at every two or three steps, mistaking every bush and tree, and fancying every stump at a distance to be a man.

(pp. 148—9)

(或日正午ごろのことだつたが、いつもの舟の所に行くと、海岸に人間の裸の足跡があるのを見て全く驚いた。それははつきり砂の上に残つていた。私は雷に打たれた人か或は幽霊でも見たように立ち竦んだ。私は耳を澄まし、辺りを見廻わしたが何も聞えないし又見えもしなかつた。もつと遠く見渡すのに岡にもあがつて見たし、海岸の傾斜面を登つたり下つたりもして見たが同じことで、その一つの足跡の外には見つからなかつた。もつと足跡がありはしないか、或は私の氣のせいではなかつたらうかと確かめるために最初の足跡の所まで行つて見たが疑う余地はなかつた。一つの足跡がちゃんとあつた——足の指も踵も何から何まで。どうしてそれがそこに出来たか私には解らなかつた。又想像のしようもなかつた。全く頭が混乱して氣が狂つた人のように、思ひは千々に乱れて私は自分のかくれがに歸つて來たが所謂地に足もつかない感じで、二三步毎に後を振り返ると、どの藪を見てもどの木を見ても人と見まちがい遠くの切り株も人ではないかと思つて、極度におびえておつた。)

「十八世紀英文学」の著者はこの場景の描写を評して「Defoe 以上に自意識のある芸術家たちは無人島で人の足跡を発見した描写にはもつと頁を与えただろう。然

と誤解せられるほどである。この物語は放浪と冒険を好み、実利主義に徹した英国人の国民性を如実に描写していることで、国内において大成功を収めたばかりでなく、Bunyan の *Pilgrim's Progress* や Swift の *Gulliver's Travels* と共に最も広く各国語に翻訳されている英国小説で、我国でも安政四年に蘭語から「魯敏遜漂行記略」としてその梗概が訳出され、明治十六年には井上勤訳の「<sup>絶世奇談</sup>魯敏遜漂遊記」が刊行されている。然しここで問題にしたいのはそういう popularity についてではなく、この物語が近代小説への第一歩を踏み出した諸要素についてである。まず 'low life' (下層階級の生活) の描写ということは、貴族の文学 (romance) から平民の文学 (novel) への第一歩として注目すべき革新である。しかも十八世紀散文作家群アヂソン、スチール、デフォウ、スキフト等の中でもデフォウが近代小説への接近に先鞭をつけたことも忘れてはならない事実である。(スキフトのガリバーはロビンソンクルソーに七年遅れて 1726 年刊行された。)

*Robinson Crusoe* の巻頭に熱病にうかされたように海外にあこがれる主人公を年老いた父がいさめる言葉がある。

……the upper station of low life……was the best state in the world, the most suited to human happiness, not exposed to the miseries and hardships, the labour and sufferings of the mechanic part of mankind, and not embarrassed with the pride, luxury, ambition, and envy of the upper part of mankind. He told me, I might judge of the happiness of this state by this one thing, viz. that this was the state of life which all other people envied ; that kings have frequently lamented the miserable consequence of being born to great things, and wished they had been placed in the middle of the two extremes, between the mean and the great. (p. 2)

(……下層階級の上位にあることは、この上ないけつこうな身分だ。人間が幸福に暮すのに一番適したことだ。みじめな目にも困難にも会わず、職人特有の苦勞にも脅かされることがなく、又上流階級の虚栄やぜいたくや嫉妬にも悩まされることがない。

この境遇が幸福であることは次のことから解ると父は言つた。すなわちそれは外の人々が皆羨む境遇だ。王侯といえども高い身分に生れたみじめさを悔むことが多く貴賤の両極端の中間に置かれることを望んだものだつた。……)

この「貧困も欲せず富貴も望まず」(he prayed to have neither poverty nor riches) ということが全巻を貫く motif となつていたのであつて、Defoe が平民の文学を開拓した人と言うことが解るわけである。「劍橋英文学史」の結論にも

"It is impossible to sum him up, but those who are not satisfied with calling him 'the author of *Robinson Crusoe*' may content themselves with affirming that he is the greatest of plebeian geniuses,"<sup>(4)</sup>

(Defoe 論を要約することは不可能だが、彼をロビンソン・クルーソーの著者

Daniel Defoe は 1660 年頃ロンドンの肉屋 James Foe の伴として生まれた。Cazamian の「英文学史」によると、‘lower middle class’ の出とあるからごく卑賤の身分であつたらしい。‘A simple education’ を受けた後大陸を旅行したということ以外は、生立についてはあまり知られていない。とにかくいろいろ辛酸をなめた所謂苦勞人であつたことは察しられる。四十歳頃になつて Defoe という貴族めいた名前に改姓したことも彼の世俗性を表して面白い。生れながらのジャーナリストで、二十歳頃から色々なものを書きなぐつて、生涯に書いた著作は実に三百巻近くにも達するということである。然し一貫した主義主張があつたわけではなく、例えば当時の二大政党である Tory のために弁じたり、Whig の御用をつとめたりして無節操ぶりを発揮した。ついには敵味方からの攻撃に会い ‘pillory’ (首と手を板の孔から出して立たされた刑具) にかけて曝し者になつた事は、版画などにも残っている有名な話で、彼の人柄の一面を物語る材料となろう。

Defoe は商売を営んだり、軍人になつたり役人に出仕したりして、波瀾の多い生活の中で、常に手からはペンを離さず、政治評論、宗教上の論争文、諷刺詩 (William III のために書いた *The True-born Englishman* は有名)、貨幣論や企業論まで書き、1704 年には Addison, Steele の periodicals の先駆とも言うべき ‘The Review’ という新聞を発行したりして、ただ食うために書きなぐる雑文家として終始するかに見えたが、五十八九歳になつて *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe*, 1719, を書いて小説家としては極めて遅い出発を始めた。Defoe は結局 *Robinson Crusoe* の作者として後世に残り、又文学史の上で特異な地位を設定したのである。自余の作品は社会学者や経済学者等にとつて当時の社会事情を知るのに歴史的な興味の対象になり、彼が政治的ジャーナリズムの発展途上の中心人物であつたことを意味するものにすぎない。文学史の上では *Robinson Crusoe* の著者としての彼が世界最大の小説家の一人として当然に記憶されることが重大な事実である。この趣意を「十八世紀英文学」の著者 McGutcheon 氏は Defoe 論の結語として次の如く断じている。

“To the sociologist and the economist Defoe’s minor writings—yet major in volume—are of historical interest still. He is a central figure in the development of political journalism. But as the author of *Robinson Crusoe* he is justly remembered as one of the world’s greatest story tellers.”<sup>(2)</sup>

### 3

「劍橋英文学史」の Defoe の章を見ると、彼の文学史上の地位を “a pioneer novelist of adventure and low life” とか “an unequalled novelist of adventure and low life”<sup>(3)</sup> と明快に決定している。「冒険小説の開拓者」ということは、説明するまでもなく *Robinson Crusoe* が少年少女の読物にすぎない

今一つの重要なことは、その登場人物は王侯貴族とその一統であり、ロマンスは即ち貴族の文学であることである。(但し後代のフーター・スコット等の小説の中に含まれるロマンス的要素をもさす広義のロマンスと、ここでいう中世の架空物語とは勿論峻別すべきものである。)

このような架空の物語から、人間生活の描写を主題とする小説への移行には、幾多の変遷を経なければならなかつたが、その主なる媒介は‘Essay’の発達と定期刊行物の発行に帰すべきものが多い。大陸に於ては16世紀頃から‘Essai’と称される文学形式で盛に人性論が行われたことは周知のことで、フランスではMontaigne : *Essais*, 1580 (随筆集) や Pascal : *Pensées*, 1670 (冥想録) が今日でも仏文学の大きな遺産となつている。英国では Bacon : *Essays or Counsels Civil and Moral*, 1597—1625. を起点として、韻文ながら “the proper study of mankind is man.” (人間相応の学問は人間についてである。) と歌つた Pope の *Essay on Man* (1733—4) などこの系列に入れてよからう。これらの文学はこれまで雲上人の物語にむけられた人間の眼を我々自身の生活に転換させ、人間の知性に訴えて、人間とは何かという主題を追究したものであり、“Homo sum ; humani nihil a me alienum puto.” (我は人なり、人に関する如何なることにも無関心たり得ず。) といったローマの Terence の文学精神への復帰とも見られる。

次に英国の定期刊行物はこれよりも遅れて17世紀の中頃に起つて<sup>(1)</sup>、18世紀になつて発達したが、中でも Addison と Steele の *The Tatler*, *The Guardian*, *The Spectator* が次々に発行されて、日常茶飯事が文筆の対象となつた。彼等は常識と平凡を重んずる文体を以て、始めて社会に実在する人物を捕えて、その性格描写を試み、wit に富む文章に依つて、日刊紙上に活躍させた。それは娯楽と実用を目的とした periodicals に掲載される制約のために、統一のある plot を持つた小説文学の形式にまで発展しなかつた。しかしそれらの作品が持つ社会性が庶民の文学を起す機運を作つたことは否めない事実である。

この様な環境にある18世紀は一言で言えば所謂「散文的な時代」と評される如く、ほのぼのとした神秘的な勇士美姫の夢物語から、生々しい地上の生活へと文学の世界を引きおろした時代であつた。

## 2

18世紀は散文的な時代と言われる。この意味で Daniel Defoe (1661—1731) は徹頭徹尾18世紀人であつた。Swift の style には詩がないと漱石は評しているが、Defoe の文にも詩的な描写が少ない。「デフォーの小説はある意味において無理想現実主義の十八世紀を最下等の側面より代表するものである」(「文学評論」p. 399) という漱石の批評は余りにも酷にすぎるかも知れないが、たしかにこの二人の18世紀人は黎明期に於ける英国小説の代表者であつた。結論を先に言えば Swift は諷刺文学の元祖であり、Defoe は写実主義の小説の開拓者である。



# 英文学史に於けるデフォウの地位

## —— ロマンスから近代小説への橋頭堡 ——

平 敷 安 貞

### 1

英国に於ける本格的な近代小説はリッチャドソンとフィールデングを出発点とすることは、文学史家のひとしく認めるところである。「パメラ」の刊行は1740年であり、それから更に9年後に「トム・ジョーンズ」が世に出たのであるから、我が「源氏物語」が凡そ西暦1000年代に執筆されたと推定すれば、どんなに英国に於ける小説文学が遅れて発生したかがわかる。どこの国の文学史を見てもその発端は素朴な民謡にあるといわれるが、英国に於いては詩について、劇が長く文学の王座にあり、小説其他の散文文学が入つて来る余地がなかつたのである。

散文文学の中で、小説の発生以前に、所謂ロマンスが現われたのは、西欧文学に共通の現象である。ロマンスとは、もとロマンス語即ち古典ラテン語に対し、その派生語である新興の地方語殊にフランス、スペイン、プロヴァンス等の方言をさすことから、それ等の言葉で書かれた物語をも意味する様になつたことは周知の通りである。

「Roman（即ち英語の Romance）はその名の示す様に僧侶文学者の時代に、ラテン語で書かれた正規の古典に対して、俗間の言葉で書かれた今様の物語を意味している。」という Albert Thibaudet (1874—1936) の言葉は、丁度我国の「物語」が男子の学問である漢文に対し、女子の文学作品として発達したことや、中国に於いて漢代に小説という語が稗官と称される下級の役人に依つて、「街談巷説」を上官に報告するために書かれたことから起つたのに類似している。つまり「ロマンス」というのは、俗語や方言の物語である。*The Development of the English Novel* の著者 Cross に依ると、英国に於いては14世紀頃からこの言葉が流通していたらしい。然し英文学でロマンスの先駆ともいふべき有名な Sir Thomas Malory の *Morte d' Arthur* が Caxton に依つて印刷されたのは1485年のことであるから、この様なロマンスが書籍として一般に流布したのは16世紀からと見てよい。

当時のロマンスの内容は、おしなべて中世騎士道の冒険や恋愛が主なるテーマで、非現実的な架空の物語であることを特色としている。この意味で「ロマンスは趣向を荒唐無稽の事物にとりて、奇怪百出もて篇をなし、尋常世界にあらはれる事物の道理に矛盾するを敢て顧みざるものにぞある。」という逍遙の「小説神髓」中の一節は今日でもロマンスの定義として借用できる言葉である。なほロマンスについて